

## 中国語発音指導の新方式 －日本語と中国語の同形語を活用して－

徐 彩華

日本語と中国語は文法こそ大きく異なるものの同じ漢字を使う言語であり、さらに言えば、日中双方の語彙の中には同形語も存在する。具体例としては、意味も発音も似ているものとして「參觀」「新年」「利用」「心理」「感動」等、意味が異なるものとして「激動」「用意」「検討」「看病」「緊張」等があげられる。

これまでの中国語の指導は主に教科書中心で、「日中同形語」は有効に活用されてこなかった。なぜなら意味が同じ同形語は簡単に覚えられるが、意味が異なる場合はかえって間違えやすいというマイナス面も持ち合わせているからだ。

しかし最近では、専門家の間でも現行の指導方法を疑問視する声が高まっている。日本人学生はすでに中国語の“漢字”を修得済みで、全くのゼロからのスタートではないのに、そのメリットを活かしていないというのだ。また、統計によると外国人が学ぶ中国語において最も頻度の高い甲・乙レベル約 3000 字の中で（実際は甲～丁の 4 段階に分類されており、全部で約 8800 字）、日中同形語は半分近い約 1200 字、かつその大部分は、意味までも同じであることが判明している。したがって、これらを上手に活用すれば、学生はより効果的に中国語を学べるようになる」と指摘している。

私は 2004 年 9 月から約 2 年間、立教大学ランゲージ・センター嘱託講師として教鞭をとったが、まず 1 年目を終えた時点で、学生たちにある特徴が見られる

ことに気づいた。それは漢字や文法の間では特に問題ないものの、入門段階のピンイン（発音のローマ字表記）や発音に弱いということである。

非表音文字の中国語をピンイン無しで読むことは不可能であり、発音・ピンイン表記を覚えるための反復練習も決して容易ではない。さらに、発音についていえば、中国語は 1 音節の中で音の高さが変化する「声調」を伴う言語であり（「四声（しせい）」と言い、1 声から 4 声まである）、3 声と 3 声が続く場合や、「一」「不」の後に言葉が続く場合、発音の変化が生じることもある。したがって、少しでも発音を間違えると言葉の意味が変わることとなり、正しい発音なしに会話などできない。そのため、中国語の発音をマスターすることは外国人にとって高いハードルのひとつとなってしまう。

現状を見る限り、中国語における基本中の基本であるピンインと発音で、学生はつまずきやすい。しかし、この関門さえクリアできれば、本来中国語と共通点の多い言語を母語とする日本人学生は絶対的に有利であるはずだ。ところが、「同じ漢字を使う言語だから」という理由で中国語を第二外国語（言語 B）として選択した学生は、最初の頃こそ楽しそうに勉強しているものの、慣れないピンインと声調に悪戦苦闘するうちに、中国語に対する熱意が徐々に薄れていってしまうようだ。

そこで、この悪循環を打開するため、私は「日中同形語」を有効活用し、これ

までとはひと味もふた味も違う入門段階でのピンイン指導方法を試みたのである。

テキスト『理香と王麗』を分析し、立教での2年目(2006年度前期)に2つのクラスで新方式を採り入れた授業を行った。ポイントは「日中同形語」に注目し、“単語とピンイン”を組み合わせて、学生たちが楽しくかつ効率的に学べるという点である。従来のテキストによるピンイン学習では、音節の発音を練習するだけで漢字も言葉の意味も出てこないため、まったく無味乾燥であった。せいぜい最後に「爸爸(お父さん)」、「再見(さようなら)」などの単語が出てくる程度である。

さらに、ピンインの学習は通常約3～4週間かけて行われるため、時限数でかぞえると合計16時限程度となる。ということは、学生はこの退屈な勉強を長時間強いられるわけで、それではやる気も続くはずがない。それならば、同形語を使うことで意味も加わって発音も覚えやすくなり、効率が上がるはずであると私は考えた。ただし、そこで語彙数を増やしてしまっただけでは逆効果なので、適度を見きわめつつ実施することとした。

以下、指導においての5つのポイントについて述べてみることにする。

## 1. 教える順番を入れ替えて、効率アップ

『理香と王麗』でのピンイン学習は段階を追う形になっていた。第一課では声調、続いて「声母」(音節の初めにくる子音＝頭子音)と前鼻音「韻母」(音節中の頭子音を除いた残りの部分)との組合せ、「声母」と後鼻音「韻母」との組合せ、儿化音と声調の変化と順番に進み、最後は「声母」と「韻母」の全てを表にして全体の復習をするという流れであ

る。となると第四課で「声母」と「韻母」を全て学び終えることになり、これでは語句の導入が遅れてしまう。

そこで、私はテキストの順序は守りながら、第一課の段階で声母(頭子音)表を使った授業を行ってみた。英語の「ABCの歌」を少し変えて中国語版「ピンインの歌」も作った。この歌には「声母」と「単韻母」が全て網羅されており、さらにSVO構造の「我们都来学拼音」(みんながピンインを学ぼう)という文章も入っている。これで学生は学習初日に全ての声母に触れることになり、同時にちょっとした「中国語」を話すこともできるようになるわけである。まとめて声母を教える方法は、学生が体系的に学べるという点において非常に効果的であり、また、その分学生が苦手とする発音練習に時間をまわすことも可能になる。そして、難しい発音の反復練習や聞き分けにおいても、語句の中でポイントをとらえるよう指導した。

## 2. 意義と音節をうまく組み合わせ、楽しく練習

さらに、学生にとって身近な表現を用い、簡単に暗記することができるような練習を行った。

単韻母を学習する際の具体例として；“eの4声”では「肚子饿了(お腹がすいた)」、「iの1声」では「冷了要穿衣(寒くなれば上着を着る)」、「uの3声」では「高兴了要跳舞(嬉しくて躍り出す)」そして“yu(u)の2声”では「日本人最爱吃的是鱼(日本人が一番好きな食べ物に魚です)」等

また「複韻母」と音節組合せの学習においても同形語を使って発音とピンインを学べるようにした。その具体例；“an”(安心)、“ai”(失敗)、“ou”(豆腐)、“en”(人民)、“ian”(先生)、“iao”(料理)、“un”(『論語』)、

“ing”（京都）等

これらの単語は日本語と中国語の発音が同じものがあれば違うものもあるため、学生が関心を持ち、勉強する意欲も増すのである。ただし、全ての音節に単語をあてるわけにはいかないので、毎回7~8個の単語を選んだ上での練習とし、その他の多くの時間は発音の訓練にあてた。すると、この同形語を用いた練習は、単調な反復トレーニングにおいて「画竜点睛」のごとき効果をあげたのだった。

### 3. コミュニケーションを取り入れた「グループワーク」

自分の名前に漢字を使っている学生は非常に多く、この利点を見逃すのはもったいない。そこで私は、まず学生に自分の名前のピンインを覚えさせ、読み書きの反復練習をするよう指導した。続いて2人、4人組、最後はクラス全員にまで広げ、「こんにちは。私は〇〇と申します。あなたのお名前は？」といったように自己紹介を実践させた。また、池袋、新宿などの地名や中央線といった路線名も使って、身近な言葉から楽しく中国語に触れるようなしかけを作り、発音・ピンインを無理なく覚えさせていった。

### 4. 単語・短文を使って、声調に対する感覚を早期の段階で

中国語の学習で最も苦勞するのが「声調」である。初歩の段階でしっかりと修得しておくことが非常に重要で、あとから矯正しようとしても無理なのである。実際、声調を正しく身につけていなかったために、上級になってからも正しい発音ができずに後悔している学生も多い。当然ながら、日本にいと授業以外で中国語を「耳にする」機会も少ない。そこで私は、単語・短文を使って中国語の声

調とイントネーションのコツを学んでもらうことにした。例えば“ai”の場合は“愛”の文字を使い“我爱你（你=あなた）、你爱我、我爱立教大学、你爱立教大学、我们（我们=私たち）都爱立教大学”というように、“ian”では“天气（tianqi）”を使い“好天气、坏（坏=悪い）天气、天气预报、我爱好天气、我不爱好天气”というように、単語→句→文と繰り返し練習できるようにした。毎時間1~2回の練習で、学生はイントネーションだけではなく文の構造についてもかなりの感覚を身につけることができたようだ。

### 5. テキストの朗読をしっかりと

入門の時期は発音がまだ不安定である。そのため、単語は問題なくても、文章として読ませると発音が狂ってしまうことが多い。

ピンインと発音は、最も重要なく中国語の基礎>であり、我々教員に対しても、しっかりと指導することが常に要求されている。そこで、私はテキストの反復朗読を実践することにした。順序としては単語練習からスタートし、続いて、テキストの朗読→テープと一緒に朗読（テキスト有り）→テキスト朗読→テープと一緒に朗読（テキスト無し）→朗読（ピンイン無し）といった具合である。朗読を繰り返すが、その都度条件も目的も異なっている。読む-聴く-読むを交互に行うことで発音の正確性が高まり、正確に発音することでヒアリング力も高まるのである。

また、この方式も教員が中国語を使って授業をすればその効果はアップするだろうと考えている。

そして、これらの効果は学期末に数字となって現れた。

2005年度は67点だった統一テストの

クラス平均点が、新方式を採用後の2クラスの平均点は88点、86.6点となり、学年全体平均を大きく上回ったのである。さらに重要な点を付け加えるならば、なんとと言っても学生の中国語に対する熱意そのものが高まったことであろう。

この新しい試みはまだスタートしたばかりで、使用する同形語の数や評価方法など、今後に向けての改善点もたくさんあることは言うまでもない。しかし、私としては、ぜひ多くの専門家にこの方法に着目してもらえればと願っている。中国語にある「抛石引玉」(れんがを投げて玉(ぎょく)を引き寄せる)という言葉のあるように。

最後に、この場をお借りして谷野典之先生、呉悦先生、細井尚子先生、そして舛谷鋭先生にお礼を申し上げたい。立教大学で教鞭をとることができたのも、先生方のご尽力のおかげだと感謝している。また、慣れない環境での仕事や生活が順調に進むよう協力をして下さったランゲージ・センターの王佩民先生、王紅艷先生、大野香織先生、河田聡美先生、今井俊彦先生に、また、今回翻訳を担当して下さった、全学共通カリキュラム事務室の森園さんにもお礼を申し上げたい。

立教の2年間は私にとって非常に充実した、かけがえのない時間であった。すばらしい仲間、学生、そして立教大学全てにこの拙文を捧げたい。

#### 参考文献

- 李煒：論日本学生学習漢語的起点問題  
北京外国語大学国際交流学院編《漢日語言研究文集》北京出版社(2000)  
魯宝元：漢日同形詞対比研究与対日漢語教学  
北京外国語大学国際交流学院編《漢日語言研究文集》北京出版社(2000)  
徐彩華：日語環境中漢語教学効率の再思考  
立教大学ランゲージセンター紀要12号 63-70頁(2005)、日本学生漢語拼音学習中難点初探  
立教大学ランゲージセンター紀要15号 35-44頁(2006)

Xu Cai Hua / じょ さいか  
(中国・北京師範大学漢語文化学院副教授、  
元本学ランゲージ・センター嘱託講師)